

## 多様性

桑野小学校 四年

よこた  
横田 ゆいり  
唯里

(敬称略)

「今日ほどの服にしよう。」と、私は黒い服を手を取った。様々な色やもよう、スカートやズボンなどを持っている。私はある時、ふと思った。「周りの男の子は、暗い色の服を着ている子が多いなあ。」と。どうしてだろう。

男の子は、赤やピンクの服を着ることにはずかしさを感じているのではないかと思う。自分が着たい服を着ればいいのに、どうしてそれがはずかしいのだろう。女の子みたいな服を着ているといわれるから？みんなが赤やピンクを着ていないから？仮にそうだとすると、どちらも他人の目線や意見を気にしすぎている結果ではないだろうか。他人の目や考えを意識することが、全て悪いということではない。しかし、気にしすぎてしまうと、自分らしさが出せない。服装にまちがいや正かいはない。好みだけではなく、その日の気分によってもかわるだろう。

かみがたも同じだ。男の子がかみを伸ばして結んでもいいし、女の子が短くしたっていい。それが個性なのだと思う。

しかし、私たちは人とちがうことをする、ということになれていないのかもしれない。周りとちがう見た目や行動は、人から変な目で見られるかもしれないという不安が大きいのではないだろうか。だから、人と同じことをしてしまう。きつと、「一人じゃない。」という安心感があるからだ。

最近「多様性」という言葉をよく耳にする。集団の中で、異なる特性をもつ人が、共に存在するということだが、実際には「同じ」があふれていると思う。そして、それは私自身にも言える。個性や多様性をもっと出すべきだと思いつつも、私も「同じ」にしてしまう。テレビ番組で、全身赤い服の人や、コスプレをしている人が出演することに違和感はない。もちろん、「全員が」というわけではないが、都会の人は、実際に見かける機会が多いので、同様のことがいえるのではないだろうか。

反対に、田舎で暮らす人は、目立つ格好をしている人が少ないように感じる。一人でも変わった人がいれば、すぐ目につく。物珍しい目で見る人が多いのかもしれない。

私は、見た目のちがいで悲しんだり、つらい思いをしている人を減らすため、見た目で判断せず、まずは自分から相手を受け入れようと思う。周

りの目線を気にしすぎるあまり、着たい服を着れなかったり、同じようなかみがたにしなければならぬのはいやだ。全く同じ個性を持っている人は少ないと思う。全ての人が周りの目を気にせず、もっと自由な選択をすることが出来る社会になってほしい。

これはとても身近にある差別の一つである。経験がある人もいるだろう。笑って気にしない人、一生心に残ってしまう人、いやな気持ちになってしまふ人など、受け取り方は様々だろう。

自分の思いや考えは大切にすべきだ。しかし、それと同じくらい、相手の気持ちも大切に見てみよめ合っていききたい。